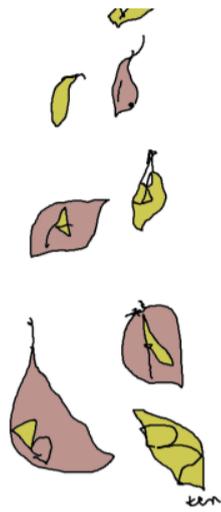


■今月の特選句

落葉にもA面B面ありにけり



長井多可志

### 落葉にもA面B面ありにけり

長井多可志

落葉の表裏をA面とB面で表現して新鮮。最近アナログのレコードが人気になっているが、この句は少し古い人間でないと良さがわからんかな。

### 文化の日知事の失言じゃこ天の

沖枇杷夫

秋田県の佐竹敬久知事が四国の料理は「貧乏くさい」と発言し、謝罪会見や四県知事との手打ちに追われた。言葉には教養と文化度が出るね。

文化の日知事の失言じゃこ天の



「こや」天は貧乏くさい」

「しめんささい」

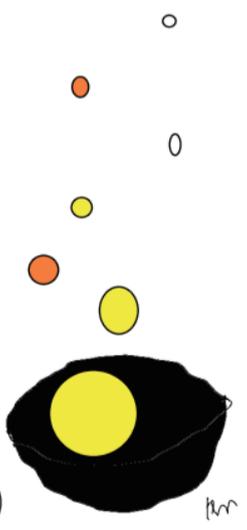
沖枇杷夫

### 社会鍋小銭にかかる手数料

高田敏男

赤いポストの貯金箱に小銭を貯めて郵便局に持参すると、硬貨取扱料金が発生。善意、好意にも容赦ない。「これからはカード決済に社会鍋」。

社会鍋小銭にかかる手数料



高田敏男

## ■今月の特選句



## 年用意掃除はさつささしすせそ

西野周次

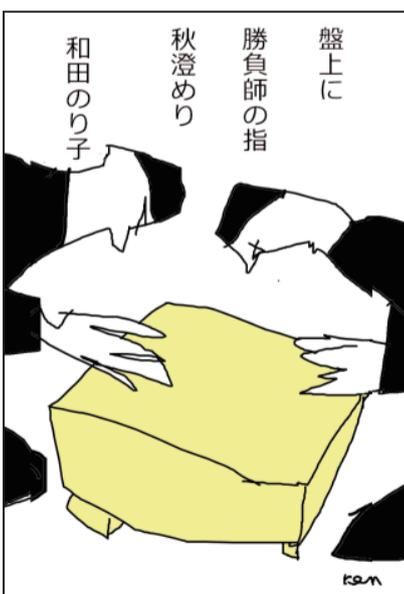
なるほど掃除は、さ行がいいね。「さ」っさと「し」まつし「す」ばやく「せ」んたく「そ」うじ機かける。俳句に大切な言葉遊びとリズム感があって軽快。



## 終活や帯はバッグに返り咲き

井野ひろみ

和服の利用の衰退は、華麗な帯も巻き添えにされている。終活で処分するはずだったが、帯をバッグに仕立てた。本当の意味での返り咲きですね。



## 盤上に勝負師の指秋澄めり

和田のり子

将棋の藤井聡太名人のことだね。史上初の最年少八冠独占を決めた勝負だろう。「指先」にスポットをあて、季語の「秋澄む」を配して見事である。

## ■今月の秀逸句（・・・七七をつけてみました）

大根にも太尻細尻丸い尻

・・・みんな違つてみんないい

着ぶくれて首の回らぬ不況かな

・・・好況ならば薄着で回り

礼状に礼状書いて去年今年

・・・礼には礼をもつてかへさむ

扉を叩く凧一号捜査員

・・・決して扉開けちやならぬぞ

論客に口をはさめぬおでん酒

・・・おでんの串をはさんだままで

大欠伸喉彦までも小春かな

・・・喉彦さんを小春が覗く

折り鶴をジェット気流に乗せガザへ

・・・せめて祈りが届きますやう

一瞬を幾つも重ね大晦日

・・・人生とてもあつといふ間よ

枯枝の今が自由の手ぶらかな

・・・背負ふものなき気楽な時間

抜け出した私を蒲団が恋しがる

・・・などと詠んでも相思相愛

鏡台に太田胃散や三が日

・・・用意もできてしかと食らはむ

湯けむりを風が崩して冬の夜

・・・風急なれど月は流れず

着膨れの中に本音を隠しきる

・・・羅(うすもの)着れば本音の透けて

浜田イツミ

柳村光寛

ほりもとちか

南とんぼ

井口夏子

壽命秀次

遠藤真太郎

稲葉純子

大林和代

岡香代子

山本 賜

川正紀子

峰崎成規

## ■今月の滑稽句

\* 今月の特選句・秀逸句以外の佳句を青字で表示しています。

蓮根掘る一本泥の修羅場より

帰省の子出迎ふ犬の尾ちぎれさう

いさかふや木守柿は誰のもの

考える葦も加齢で穴惑い

喜怒哀楽全て味わい生身魂

割り勘の合わない下戸の年忘れ

水涸るる爺さん婆さん軋みたり

焼蕎や湯舟に生るる屁のかたち

某(それがし)を湯治に誘ふ古狸

凧に翻弄される新聞紙

日向ぼこ顔のガードをしなくっちゃ

きみの未来は月か火星か七五三

季節迷走夏秋まだらの冬景色

千成りといふは真や隼人瓜

本堂の壁に列なす屁ひり虫

共存の道のり険しアーバンベア

冬めくや赤道直下の島に来て

出鱈目の鱈は何処に行くのやら

山茶花の垣の向こうにある異国

サンタクロースもコロナにかかり出番無し

冬将軍今年気弱や出遅れて

神の留守社務所工事を大急ぎ

お茶啜りかしまし婆の炬燵かな

冬に入る口角上げる映画観て

師走の街のキラキラ楽しむ眼鏡とり

地球丸ごと夢に出てくる浮寝鳥

父役はじっと座すまま姫椿

セーターの母に頬擦りする子かな

初鏡煌めく方のイヤリング

相原共良

相原共良

相原共良

青木輝子

青木輝子

青木輝子

赤瀬川至安

赤瀬川至安

赤瀬川至安

井口夏子

井口夏子

池田亮二

池田亮二

石塚柚彩

石塚柚彩

石塚柚彩

伊藤浩睦

伊藤浩睦

伊藤浩睦

稲葉純子

稲葉純子

井野ひろみ

井野ひろみ

上山美穂

上山美穂

上山美穂

卯之町空

卯之町空

卯之町空

紅葉の葉ひとりご飯の箸置きに  
 北風にコートの襟が立ちたがる  
 山茶花の白が散る散る冬の朝  
 法廷に遺影もつ人外は雪  
 マタギには太古の記憶息白し  
 着ぶくれてけさはわたしのかくれんぼ  
 武蔵野の光と影の紅葉狩  
 すいすいと二三句つくる蜜柑狩  
 温暖化なれどされどの冬至かな  
 猫じゃらし猫を相手に刻忘れ  
 初句会「初稽古」てふ気分  
 初空となる戦いの音消えて  
 せきたてられ散るや迂闊の紅葉たち  
 お四国を手話で旅する秋遍路  
 月夜茸空には名月松山の  
 母起きる子どもの小さな咳ひとつに  
 頂いた手編みセーターまだ着れぬ  
 ぶかぶかのコートに埋もれて赤いほほ  
 城一つお堀も一つ十二月  
 手招きでお出でお出でと枯芒  
 北風や赤字の坊ちゃん列車ゆく  
 生涯に和服は浴衣ばかりなり  
 丸齧り柿に失礼ではないか  
 海岸を走る猪マラソンへ  
 新妻の先祖は美人海鼠(なまこ)系  
 年末やどかどか捨てる請求書  
 大根引く仕草大げさおばあさん  
 银杏散る千手観音手を変へて  
 去年今年昨日今日明日今先(さつき)

梅野光子  
 梅野光子  
 梅野光子  
 遠藤真太郎  
 遠藤真太郎  
 大林和代  
 大林和代  
 小笠原満喜恵  
 小笠原満喜恵  
 小笠原満喜恵  
 岡田廣江  
 岡田廣江  
 岡田廣江  
 沖枇杷夫  
 沖枇杷夫  
 加藤潤子  
 加藤潤子  
 加藤潤子  
 門屋 定  
 門屋 定  
 門屋 定  
 北熊紀生  
 北熊紀生  
 久我正明  
 久我正明  
 久我正明  
 工藤泰子  
 工藤泰子  
 工藤泰子

病室の明け難く毛布引き被る	くるまや松五郎
痰絡む他人の寝息や我は水漬	くるまや松五郎
立会いの姉家出る頃か冬の朝	くるまや松五郎
金紅色の残像揺るる狗尾草	桑田愛子
出汁昆布に鉢入れれば冬に入る	桑田愛子
紅葉晴アフターバーナー次々と	桑田愛子
「あったかい」「小春ですねえ～」とランドセル	壽命秀次
幼子が二枚に描く翳雲	壽命秀次
腕白の父も腕白七五三	白井道義
老々の介護勤労感謝の日	白井道義
木の実降る運も不運も紙一重	白井道義
クリスマス発表会は白タイツ	鈴鹿洋子
らしき影ひたひた迫る寒の雨	鈴鹿洋子
父を待つ改札口の時雨傘	鈴鹿洋子
素通り軽い会釈の郵便屋	鈴木和枝
愚痴もあるさ日曜日の万歩計	鈴木和枝
竹千代像が大好き落葉集まる	鈴木和枝
秋晴やじやこ天プラスきりたんぽ	高須賀溪山
亥の子突おさなご姉妹も寄せ集め	高須賀溪山
落人の夢や紅葉の平家谷	高須賀溪山
水虫の動き出したり足焙	高田敏男
節料理にされると蛤大あわて	高田敏男
小春の日仏像巡りの脚かろし	田中 勇
老年の吾のごとしや冬の虫	田中 勇
冬紅葉路上生活者の語り	田中 勇
招かれぬ猫の近づく羽蒲団	田中やすあき
玉子酒叩くラジオの浪花節	田中やすあき
身長縮むはずなき冬至風呂	田中やすあき

独り言言ってみちやつて冬の夜	谷本 宴
ずわい蟹苦手なミンも旅の味	谷本 宴
立冬や好きな言葉は希望です	谷本 宴
走る子の息に色なし冬浅し	千守英徳
冬霧の橋天国に続く道	千守英徳
急かしても焦る事なき冬紅葉	千守英徳
露天風呂帰りの雪に風呂わかす	月城花風
クリスマスケーキを死守す満員電車	月城花風
母は爆買い着ぶくれの子の手を引きつ	月城花風
鮫鱈と聞けばはるみを歌いだし	土屋泰山
柚子の実や坂本九が笑ってる	土屋泰山
きりたんぼじゃこ天仲良く道後の湯	土屋泰山
冬将軍なんと可愛いイラスト画	坪田節子
亡き母のおでんの味に届かない	坪田節子
冬至まで夕暮れことに気忙しい	坪田節子
もう涸れてゐるかもしれぬ冬銀河	長井多可志
蕪太り腕から消える力瘤	長井多可志
風邪の身に亡母の味とも玉子酒	長井知則
寝たきりの義母に親しき冬の蠅	長井知則
昼飯の♨の蕎麦湯の満足感	長井知則
表札の文字を行書に十二月	永易しのぶ
子の部屋にそおつと届けるクリスマス	永易しのぶ
日記買ふ三行の欄があるだけの	永易しのぶ
木枯の共鳴バツハベートーベン	西野周次
花芒右に倣へと靡(なび)きけり	西野周次
青かびが懐かし密封の鏡餅	花岡直樹
寝落ちなどしないと誓い炬燵出す	花岡直樹
初夢は一富士二鷹三ビール	花岡直樹
貯水率ゼロのダム湖や柿たわわ	浜田イツミ
太太と金賞の帯しめお大根	浜田イツミ

乳母車に犬鎮座して山笑ふ  
 探し物はて何だつたつけ目借時  
 橋渡る水蛭蟻にとりつかれ  
 気忙しくして年末らしくする  
 息白く真つ赤な嘘をついてゐる  
 アルファベット並べたやうな冬木立  
 七五三わたし恥づかしガールなの  
 七五三家族全員参加の日  
 七五三なだめてあやす係ゐて  
 寝正月物価高には逆らわず  
 年毎に質素となりししめ飾  
 まずビール焼酎ワイン年の酒  
 忘れたき事は山程年忘  
 テレビ句会のための三句も年用意  
 鳥達の残り頂く今年柿  
 揉め事に割って入った冬の雷  
 冬の虫ひそと入居すケアハウス  
 尻軽がわんさと寄する柚子湯かな  
 無月の夜繕ふ女のまるき影  
 二度三度日時確認忘年会  
 着膨れて友を見送る仮葬かな  
 湯冷めするかも白髪の交じり過ぎ  
 革ジャンをはおればタトゥー入る気分  
 北窓を塞げばにらむシュレッター  
 凧さん優しいけれどグーパンチ  
 菓よりたまご雑炊腹が鳴る  
 ご馳走らしいよ最近のお雑炊  
 食通よ風呂吹き大根の吹き方も  
 しはすせわしいさ行がせまる十二月

久松久子  
 久松久子  
 久松久子  
 日根野聖子  
 日根野聖子  
 日根野聖子  
 藤森荘吉  
 藤森荘吉  
 藤森荘吉  
 細川岩男  
 細川岩男  
 細川岩男  
 ほりもとちか  
 ほりもとちか  
 南とんぼ  
 南とんぼ  
 峰崎成規  
 峰崎成規  
 明神正道  
 明神正道  
 明神正道  
 椋本望生  
 椋本望生  
 椋本望生  
 森岡香代子  
 森岡香代子  
 八木 健  
 八木 健  
 八木 健

ハタハタとハタハタ並ぶ煮付けかな	八塚一青
登りたい山を調べる大晦日	八塚一青
全国の銘菓が机に仕事始	八塚一青
野獣派は煩惱減らず除夜の鐘	柳 紅生
水差せばなほもえあがりおでん酒	柳 紅生
おでん酒ママから生まれなぜパパ似	柳 紅生
ずわい蟹ずわいの意味も知らず食う	柳村光寛
落葉掃く腱鞘炎をなだめつつ	柳村光寛
東平(とうなる)に咲く冬桜古き街	山岡純子
物語紡ぐや冬の星座たち	山岡純子
紅葉散り明日へ繋ぐ生命かな	山岡純子
うつむいて桜紅葉の落つるを待つ	山下正純
煙吐くゴジラのごとし息白し	山下正純
捲り曆のごと桜紅葉の一二枚	山下正純
まだ続く駅の改修秋深む	山本 賜
石のごと重い鍋蓋七日粥	山本 賜
出不精の姉に届ける柿紅葉	横山洋子
紅葉狩二の足踏ませる人の波	横山洋子
とろろ汁みんな揃つてヨロヨロと	横山洋子
忘年会幹事の仕事と靴揃へ	吉川正紀子
酔ひきれぬ忘年会の幹事かな	吉川正紀子
買ひ手なき空き家の話日向ぼこ	渡部美香
デュエットのサビではずれる聖夜劇	渡部美香
マリヤ役より天使がいいの聖夜劇	渡部美香
慟哭の渦巻く瓦礫文化の日	和田のり子
抱卵のやうにも見えて石榴の実	和田のり子